

「後南朝」と『拙堂文集』覚書

武田昌憲

一、はじめに

複雑な南北朝時代の後に続く室町時代の一角に「後南朝」の活躍時期があった。地域的に限定され、不明な点も多い。「後南朝」の語自体も発生・由来が曖昧であった。ところが近年、「後南朝」の初見については森茂暁氏がその都度丁寧^(注1)に指摘されている。

この氏の指摘によって「後南朝」の呼称・理解が広まることとなったといってもよいだろう。

森氏によると「後南朝」という語の初見は齊藤拙堂の『拙堂文集』(明治十四年刊。後、平成十三年再版)に収められている「後南朝遺蹟碑記」に載る「後南朝」と言われている。その指摘はすでに大西源一氏の指摘があることものべられている。(大西源一「後南朝と北畠氏」(『後南朝史論集』所収。昭和三十一年(一九五六)新樹社、後に昭和五十六年(一九八二)再刊。原書房)での『拙堂文集』の指摘が最初という。)

実際には大西氏の論文の末端に指摘されているだけで通過してしまいそうな文であったが、森氏の再指摘でその重要性が再認識できた。^(注2)

この『拙堂文集』の著者、齊藤拙堂(寛政九年(一七九七)～慶應元年(一八六五))は伊勢・津・藤堂藩の儒学者。地理的にも伊勢の北畠氏の根拠地に藩を置くこともあり、また吉野に近く、『南山巡狩録』や『残桜記』の跋文も残している(『拙堂文集』所収、後述)ので南北朝時代を含めて「後南朝」の事跡については相当の関心があったと思われる。次に「後南朝遺蹟碑記」の本文を掲げる。読みは適宜私的に付し、また適宜改行した。

二 「後南朝遺蹟碑記」の本文

「南朝之事。豈忍^レ言哉。前南朝猶然。況後南朝之式微乎。後南朝何。謂^二後龜山帝之後^一也。

帝之子某號「小倉宮」。宮之三子為「天基王圓滿院空因王」。空因有「二子」。兄曰「尊秀王」。弟曰「忠義王」。初足利氏患「南朝擁「神器」。疎「中動人心」。勸「帝講」和。傳「神器於北」。約「兩統」遷立如「先代故事」。

其後及「禪代之際」。負「約不立」南胤。小倉宮悲憤。糾「伊勢國司北畠滿雅等」起「兵」。兵敗。滿雅死。而宮遜「於嵯峨」。

嘉吉中。天基王與「圓滿院」謀。率「楠氏遺孽」。夜入「禁中」。収「神器」。去據「叡山」。追兵圍而攻之。天基王與「楠二郎」死之。圓滿院抱「神器」逃竄「於吉野川上」。久「之如」紀國「舉」兵。亦不「捷」而死。空因初匿「近江」。後來「於川上」。久「之俎」。尊秀王遷「於小瀬龍泉寺」。召「集」義徒。守「神器」焉。足利氏患「之」。陰許「赤松餘黨」之請。入仕「於小瀬」。伺「間」戕「王」。奪「神器」去。其士覺追「之」。不「及」。神器遂北。時王年僅十八。長祿元年十二月二日也。及葬「王於神谷金剛寺」。諡曰「自天親王」。忠義王免「難不」死。義徒又推「戴」之。築「宮於高原」。號「岡室御所」。奉「王

遷焉。翌年正月四日。俄獲「疾」しゅ。年僅十六。南朝正統之胤絕矣。遺民不「堪」わん「惋」。及葬「王於御所側」。以「其傍」近福源寺「為」拜奠所。

至「今」四百有餘年。香火不「絕」。川上鄉有「三十三村」。小瀬高原並在「其中」。每歲二月五日闔「郷」之民。祭「祀」二王。出「其所」遺金鍔寶刀「一」拜視。稱為「朝拜」。高原之墓。僅存「小石佛」。而其遺宮。

至「弘化戊申秋」。為「大風」破壞。福源寺主紹接恐「其久」之弗「可」識。欲「立」碑表「之」。謀「之於篠田定勝」。定勝吾勢下川村人。從「余遊」。有「好古之癖」。以「其居隣」北畠氏遺喘陟。好談「舊事」。遂及「南朝事跡」。屢遊「吉野」。以「檢」かぎ「覈」之。及「三寺主」之請。慨然許「之」。以「北畠氏」為「南朝忠臣」。取「其墟礎石」。遠輸「之於高原」。磨治為「碑」。請「文於余」。余亦平生感「念南朝」。至「二王事」尤悲「之」。但南山乏「記載」。事有「異同」。無「由」證正。今以「定勝所」錄遺民口語「參」攷之。以書「其概略」。云。於戲。北畠氏擁「護」前後南朝。不「以」炎涼「變」志。大義伸「於天下」。

是固當^二大書^一者也。定勝感^二於北畠氏^一。及^二南朝^一。以^二發^レ潛闡^レ幽爲^二己任^一。亦不^レ得^レ不^レ牽連書^一焉。故併書^レ之以爲^レ記。」

拙堂は「南朝之事。豈忍言哉。前南朝猶然。況後南朝之式微乎。後南朝何。謂後龜山帝之後也。（南朝の事、あに言を忍ばんや。前南朝なおしかり。況や後南朝の式微をや。後南朝何ぞ。いわゆる後龜山帝の後なり）」と後南朝の意味を定めている。すなわち、南北合一までの南朝を前南朝とし、最後の南朝

方の天皇であつた後龜山天皇以後の旧南朝の後胤を後南朝と名付けた。皇統は諸説ある中で、後龜山—小倉宮—天基王・圓滿院・空因王—空因の子尊秀王・忠義王と続き、尊秀王は赤松遺臣による襲撃で殺害。弟の忠義王は難を逃れたものの、翌年（長祿二年・一四五八）正月に病死し、南朝の皇統が絶えてしま

うというもの。通常の歴史伝では、赤松遺臣によって二皇子が殺害されて皇統が絶えたことにしていたが、ここでは一皇子が難を免れたものの翌年病死とされている。あるいは刃傷に及んで疵が癒えず、亡く

なったのかもしれない。二皇子の死を惜しんだ地元

の郷士が毎年お祭りしていることを記す。確かに後南朝の軍記には「後南朝」という記述はない。「後南朝」は江戸時代末期の現在のところ斉藤拙堂によってようやく作られた用語であつた。以後、近代に至つて定着していった。

碑文の終わり「北畠氏擁^二護前後南朝^一」という記述から、拙堂はおおよそ南北朝時代が終わる「南北合一」までを前南朝、それ以後を後南朝と区別していたようだ。

また幕末の勤皇思想の高まりとともに「南北朝」「後南朝」への関心も増したものと思われる。なお、『拙堂文集』巻六には、後南朝関係の記事を載せる『南山巡狩録跋』『残櫻記跋』が載っている。参考までに掲載しておく。

『南山巡狩録跋』

南山巡狩録跋十五卷。附録一卷。遺草三卷。幕府殿直班大草公弼編。公弼學兼^二和漢^一。著書頗多。嘗成^二此書^一。一上進蒙^二賞賚^一（たまう）。余好覲（しらべる）^二南朝事蹟^一。多觀^二前輩編述^一。

未^レ見^下如^二此書之精博^一者上也。南山不^レ置^二史筆^一。忠臣義士之蹟。殆將^二煙滅^一。有志之士所^二深概^一焉。及^二此錄成^一。幽者漸闡(ひらく)。晦(つごもり)者漸明。其功亦大矣。公弼與^二我先師精里先生^一相善。先生為記^二其野木瓜亭^一。盛稱^二其頻敏嗜^レ學。恬(やすい)退有^二志行^一。其為^レ人可^レ貴也。恨余生晚不^レ逮^二其生時^一乞^中亟大之教^上。なお「附録一卷。遺草三卷」とあるが、附録・追加で五巻が多いようだ(注3)。拙堂が見た諸本はどのようなものであったのか気になる。

『残櫻記跋』

残櫻記一卷。小瀆伴信友撰。信友江戸産。伊勢本居大平門人。其學長^二考據(よる)^一。嘗著^二此書^一。詳^二南山尊秀忠義^一二王事蹟^一。雖^下因^二大草氏附録^一推^中演^上之。論多^二發明^一。余讀^二此編^一。題^二和歌^一云。枝折^{世志}。跡踏^天分^天。吉野^{奈留}。深山隱^{礼乃}。花遠見^留留^留。語雖^レ不^レ工。庶足^レ表^二殘櫻之意^一歟。『殘櫻記』一卷とあるが伴信友全集では「上」として本文が、次いで「下」として附論が記される。次

いで「残櫻記後書」として文政七年(一八二五)八月二十八日付の本居大平の跋文を載せる。

終わりに

大西氏による「後南朝」の初見の指摘の論文も、再刊のおかげで目にする機会がふえ、理解することができたこと、齊藤拙堂の文集も明治十四年発行のものであったため広汎に知られる機会がなかった。これを平成十三年(二〇〇一)に再版して改めて知られるようになったこと。森氏の啓蒙活動などにより、「後南朝」の語が不滅のものとなっていったように思われる。

注

1、森茂暁『闇の歴史、後南朝―後醍醐流の抵抗と終焉―』平成九年(一九九七)角川書店。同氏『南朝全史 大覚寺統から後南朝へ』平成一七年(二〇〇五)講談社(令和二年 文庫本(講談社)として再刊)。同氏『正史 後南朝史』(『歴史読本』(検証後南朝秘録)平成一九年(二〇〇九)七月号。

新人物往来社。など。

2、以下に大西源一氏の「後南朝」指摘の本文を掲げる。なお本文は昭和五十六年発行の『後南朝史論集』新装版第1刷による。なお、氏の論文の表題は「後南朝と北畠氏」である。

此の文が最初のものである。終に臨んで此のことを附言して置く。」

3、『室町軍記総覧』「南山巡狩録」の項（青木晃執筆）
昭和六十年（一九八五） 明治書院

「さて嘉吉三年以来、南朝の後胤によって奥吉野の山間に奉ぜられていた神璽は、長祿元年に一ノ宮・二ノ宮が北山・川上に於て赤松氏の遺臣のために殺害され、翌二年京都に御還座になったが、古來川上郷に於ては、一ノ宮の御首は川上村神之谷の金剛寺に葬られ、二ノ宮は難を免れて高原に逃れ、翌年そこで歿せられたとしている。江戸時代の末期に、伊勢一志郡下之川村の人篠田定勝が、そのところに一碑を建て御遺蹟を顕彰し奉ろうとし、其の碑文を師の齊藤拙堂に依頼した。それに応じて拙堂が作った一文が『拙堂文集』の内に収められているが、其の表題は『後南朝遺蹟碑記』となっている。南北合一以後、南朝後胤の皇位要求に發する行動を、われわれは「後南朝」と呼んでいるが、それを「後南朝」と名づけたのは、拙堂の